

信友

信友会事務局

東京都新宿区四谷本塩町4-41

住友生命四谷ビル

電話 080-4816-3202

メールアドレス

shinyukai@tune.ocn.ne.jp

新型コロナウイルスと信友会活動

信友会会長 成田千春



信友会会員の皆様、システム通信分野の任務に従事されている現職隊員の皆様、つつがなく令和三年を迎えられていることとお慶び申し上げます。

令和二年は、新型コロナウイルス感染症に振り回された一年だったと思います。東京オリンピックも一年延期となり、自衛隊各部隊の創立記念行事等は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点等から、春はほとんどが中止又は延期となり、秋になっても新型コロナウイルス感染症が収束せず、中止又は隊員による記念式典のみの実施等に縮小され、会員の皆様と現職隊員の皆様との交流の機会が制限された一年でした。

信友会事業においても、通信科・信友会合同歓送迎会は直前の中止と言う苦渋の判断をすることになり、年に一度の会員同士の交流、現職隊員の皆様との親睦の機会がなくなつたことを誠に残念に思います。直前の中止となつたことからキャンセル料が発生し、令和二年度事業・会計報告に計上していますので、会員の皆様のご理解のほどをお願い致します。また、信友会総会も、会員の皆様の参加が困難となつたことから電子メール等により議事を議決し、その結果を信友会ホームページで報告させていただきます。さらには、地区懇親会も、令和二年度は北部地区を計画していましたが、北部方面通信群記念行事が記念式典のみの縮小開催となり、祝賀会食に併せての地区懇親会も中止となりました。

令和三年を迎え、新型コロナウイルス感染の早期収束を祈るばかりですが、治療薬・ワクチンの開発が進み、世の中に広く行き渡るまでは信友会の各事業も制約された中での活動にならざるを得ません。本年二月二十一日に予定されていた通信科・信友会合同歓送迎会も会員の皆様、現職隊員の皆様の健康と安全確保を勘案しまして、昨年に

| 主な記事 | |
|------|--------------------------------|
| 2面 | システム通信団長 西部方面システム通信群長(前) |
| 3面 | 陸上総隊司令部システム通信課長 陸上幕僚監部通信電子課 |
| 4面 | 東北方面通信群長 第四通信大隊長(前) |
| 5面 | 会員だより |

引き続き中止とさせていただきます。大変楽しみにしておられた方も多数いらつしやると思いますが、何卒ご理解のほどよろしくお願い致します。また、総会の実施要領も昨年同様電子メール等による議決とさせていただきます。また、総会議事を同封していますのでご確認ください。

その他の事業におきましても、コロナ対策を考慮しながら実施していきたいと思ひます。信友会HPによる情報発信を益々充実させるとともに、会員名簿の作成、機関紙の発行は今まで通り実施していきます。総会・合同歓送迎会は、コロナ対策を考慮しながら皆様が安心して参加できるよう計画してまいります。また地区懇親会は昨年延期とした北部地区で、北部方面通信群の記念行事に併せて実施する予定ですので、北部地区の会員の皆様の多数のご出席を期待しています。新入会員の増加施策につきましても、通信科部隊の現職部隊長宛に信友会へのご理解・入会依頼の手紙を送付するとともに、通信学校幹部課程に対する会長講話におきまして、信友会の紹介を今後も実施していきたいと思ひます。

最後に、信友会の活動が全国の会員相互の情報共有や絆のため、お役に立てるように引き続き努力してまいります。会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

「中止」のお知らせ

第五十七回総会、通信科・信友会合同歓送迎会

年に一度の懇親の場として、本年度も例年の通り総会・合同歓送迎会を計画しておりましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、皆様には安心安全に参加して頂くことが困難であると判断し、誠に残念ではありますが「中止」としましたことをお知らせ致します。また総会につきましては、実施要領等を別途お知らせ致します。

なお「第五十八回総会及び合同歓送迎会」(令和四年二月予定)につきましては、改めまして御案内申し上げますので、宜しくお願い致します。

陸自のシステム通信を支える教育の展望と課題

通信学校長

陸将補 濱崎芳夫

信友会会員の皆様におかれましては、平素より陸上自衛隊通信学校に対するご指導、ご鞭撻を賜り心より御礼申し上げます。昨年十二月に学校長の任を拝命し、「将来の自衛隊のシステム通信を担う人材の育成」を目標として職員一同日々努力を続けております。新型コロナウイルス感染症への対応のため様々な行事等が中止あるいは延期の止むなきに至っておりますが、部隊の人的戦闘力を支える教育については全校そして駐屯地一丸となり様々な対策を講じて継続中です。

今回は「陸自のシステム通信を支える教育の展望と課題」について学校教育を担当する立場から述べさせていただきますと思います。ご案内のとおり新防衛大綱では「宇宙、サイバー、電磁波といった新たな領域と陸・海・空という従来の領域の組み合わせによる戦闘様相に適応することが死活的に重要」「個別の領域における能力の質及び量を強化しつつ、全ての領域における能力を有機的に融合し、その相乗効果により全体としての能力を増幅させる領域横断作戦により、個別の領域における能力が劣勢である場合にもこれを克服し我が国の防衛を全うできるものとする」とされ、サイバー、電磁波は、宇宙領域とともに新領域の中核的



な要素と位置づけられております。この方針に基づいた体制整備もスピード感をもって進められておりますが、いかに戦い方、装備が発展しようともその基礎をなすのは十分な知識と練度を有する一人一人の隊員であることは不変です。サイバー、電磁波分野の人材育成を担う通信学校としては教育基盤の整備、内容の充実に今まで以上に積極的に取り組んでいく必要があると認識しております。

このため、サイバーに関しては民間企業等からの講師の招聘や昨年から海上自衛隊及び航空自衛隊の隊員も含めた教育を実施する等、官民連携や陸自のみならず自衛隊全体のサイバーの基本教育の取り組みを進めております。また、電磁波分野においては、新たな電子戦装備であるネットワーク電子戦システムが本校にも導入され教育を本格化しております。

また、サイバー、電磁波領域の戦いが対象とするのは、各種のシステム、通信ネットワークであることから、これまで本校が連綿と取り組んできた戦いの基盤を提供するシステム通信の構成に係る教育も更にその重要性を増しています。野外通信システム、広帯域多目的無線機等をはじめとしたシステム通信装備の能力を最大限に発揮させ、作戦部隊の戦いを支える強靱な通信ネットワークを提供するための教育も今まで以上にしっかりと取り組んでいく所存です。

更に、今回のコロナ禍を奇貨としたICTを活用した教育実施要領の見直しについても取り組みを進めていく必要があると考えております。映像伝送技術やシステムを活用した学校から部隊へのリモート教育や教育対象の学生がシステムを活用して選択的に自由な時間に教育を受講できる要領について、在隊率の向上効果と実員指揮や器材操作等の対面によってしか真髄を伝えられないものを峻別しつつ検討を進めているところです。

以上、基本教育を担う観点から陸自システム通信の展望と課題について述べさせていただきました。サイバー、電磁波分野で自衛隊が能力を高めていくための最大の課題は人材育成面にあることを肝銘し、先輩方が営々と築き上げてこられた成果と歴史、そして、関連企業の皆様からの力強いお支えに感謝しつつ、職員一同挑戦を続けて参る所存です。今後も引き続き本校に対するご支援ご協力を賜れば幸甚です。

陸上総隊の一員としての システム通信運用の展望と課題

システム通信団長

陸将補 菅野俊夫



一 はじめに

陸上総隊は、新編から三年目を迎え、陸自の全国運用・一体的運用の実績を重ねています。システム通信団もその一員として、新型コロナウイルス感染症への対応を図りつつ当面の任務遂行及び隊務運営に当たるとともに、新領域への対応を含む今後に向けた各種検討にも鋭意取り組んでいるところです。

我々を取り巻く環境は、劇的に変化しており、経験のない状況、従来どおりのやり方では対応できない状況を付与され、正に諸行無常であることを実感しています。

二 陸上総隊の取り組み

陸上総隊司令部は、作戦（Operation）とその上位の概念である戦域戦略（Theater Strategy）を担う部署へと進化しています。作戦司令部としての構想の立案と実行の管理に加え、戦域戦略司令部としての戦域の設定、即ち、より望ましい作戦環境の醸成と作戦基盤の確立に力点が移ってきています。

陸上総隊司令官の指針の下、総隊司令部と隷下部隊は丸となり、作戦運用の実効性向上を隊務運営の目的として、計画の策定、即応態勢の強化、練成訓練の充実、体制改革の推進、そして、部隊基盤の強化に取り組んでいます。

三 システム通信運用の展望と課題

システム通信は、作戦運用の基盤であり、必要とされる時期・場所に必要な機能・性能を安全かつ安定的に確保・

提供することが求められます。指揮統制を支え、情報（情報資料及びデータを含む。）の収集・分析・処理とその活用を支援し、両者を繋ぐ機能として不可欠な存在です。

そして、新領域にも深く係わる機能として重視され標的にもされ、平素から競争段階、グレーゾーンの事態、ハイブリッド戦の最前線に立つ存在であり、システム通信能力の強化と防護力の確保は喫緊の課題です。

システム通信の確保に当たっては、現有能力の不足を補うべく、部外力の活用と自らの能力を高める努力（要望）を継続し、戦域を力バーして機動的に運用できる能力を保持するとともに、限られた能力（資源）を有効に活用するための運用統制の強化が必要です。

加えて、障害の発生のみならず妨害・攻撃等を受けることを前提とし、作戦運用を継続するために必要な代替手段を確保して抗堪性・強韌性を高めるとともに、能力低下時・制約環境下での運用能力を高めることも重要です。

ハイブリッド戦への対応としては、平素からの活動を通じてサイバー攻撃及び電磁波攻撃に対する我的防護力を高めるとともに、情報活動及び他の作戦行動と連携した電磁波作戦要領とその遂行能力の確立が急務です。

加えて、情報戦や戦略的情報発信に寄与し得る現地映像写真の撮影・伝送・処理・発信能力の向上も極めて重要です。

四 むすび

コロナ禍が継続する中、米中の対立が深刻化しており、狭間にある我が国には、政治的・安全保障上の立ち位置と経済的な関係性にねじれを感じます。一方、今回明らかになった我が国のデジタル後進性については、これを機に一挙に改善されることを望むばかりです。

諸外国が技術革新・技術覇権に鎬を削る中、システム通信分野に関わる我々には、進化無限の対応、最新の機能を最大限に活用する意識と意志が求められます。新領域にも適応したシステム通信機能（部隊）は、従来の「戦闘支援機能（部隊）」から、情報機能との深い関係性をもつて指揮統制を支え戦闘機能の一部を担う、新たな「作戦運用機能（部隊）」に変わります。

関係する全隊員の研鑽と意識改革が必須です。

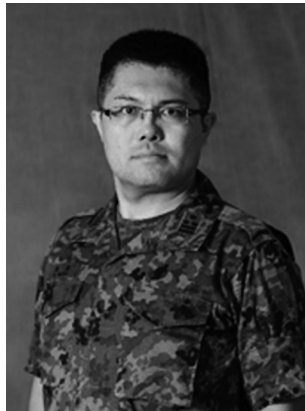
（令和二年九月、残暑厳しき市ヶ谷台にて）

時代の要請に応え得る通信科としての 部隊運用の展望と課題

前西部方面システム通信群長

（現陸上幕僚監部指揮通信システム・情報部
指揮通信システム課長）

一等陸佐 奈良 一志



信友会の皆様の、我々現役通信科隊員へのご支援ご協力に對して厚く御礼申し上げます。

平成三十年八月、西部方面通信群長に着任し、改編を経て陸自初の方面システム通信群長として約二年勤務することができました。

この間、二五大綱等の枠組みで行われた方面システム防護隊の新編、宮古島・奄美大島・長崎県崎辺における駐分屯地新設に合わせた四〇基地派遣隊の同時新編や、三〇大綱等の枠組みで陸自〇Hの段階的導入、電磁波作戦部隊の新編準備を行いました。また、サイバー攻撃等対処を含む常統不断のシステム通信の維持と、機動師団の島嶼部への展開と地域配備師団の広域展開、他方面部隊の増援に伴い生起するシステム通信基盤への加入・離脱の対応等を、島嶼部を含む長距離広範囲で実現するという貴重な経験をしました。その経験から感じた通信科としての部隊運用の展望と課題について述べさせて頂きます。

現在から将来にわたり、ユーザーの必要とするシステム通信は、平素から常統不断で、あらゆる情報の収集と第一線から必要となる行動の意思決定者までの認識共有を促進し、最前線を含め各種現況把握を可能とする基盤であると認識しました。当然、サイバー攻撃等への対策も施され安定・安心な基盤であることも同時に求められます。

他方、陸自の組織・編成上のシステム通信の能力は中隊、連隊、作戦基本部隊、方面直轄部隊等が一定の地域における本格的な戦闘において総合的に戦力を発揮するためのものであり、各級部隊がその運用上必要とするシステム通信基盤を構成・連接し、それが集合体として機

能します。このため、多次元統合防衛力を具現していく中、必要とされる長距離広範囲かつ分散展開する重要施設等の防護や島嶼部での備え・構えに必要なシステム通信を構築・維持するためには最適化がなされておらず課題があると認識しております。

長距離広範囲という課題は、我が国の優れた民間の情報通信基盤の活用を適切に行うことで実現は可能であると考えます。ただ、実現には、第一線のユーザーが民間の情報通信基盤に加入するとともに、加入後の常統的な接続の維持とセキュリティを確保する責任の一部を担うことが求められます。これはユーザーにとって新たな負荷であり、その解消を通信科部隊は求められると感じました。このため、作戦基本部隊や方面隊の骨幹通信基盤を維持することが役割の中心である現在の通信科部隊の態勢・体制を、第一線のユーザーから中央までの繋がりを担保・保証することにも対応し得る態勢・体制へと変えていくことが必要と考えます。

分散展開という課題は、部隊や戦闘システムが小規模単位で数十キロ以上離隔する実態を踏まえ、普通科連隊や方面直轄部隊等、特定部隊にシステム通信を提供する現行の部隊対応型の態勢・体制から、重要拠点や各島嶼にシステム通信基盤を展開・拡充し、そこに部隊を加入させる地域対応型の通信科部隊の態勢・体制へと変えていくことが必要と考えます。

また、これらの変革に加えて、多次元統合防衛力の具現のため、通信科部隊は、電磁波作戦とサイバー攻撃等対処にも主体的に参画していく課題もあります。大変厳しい「時代の要請」に我々は直面しております。

さらに、新たな分野で役割を広げていく一方で、技術の進歩・既存通信装備の費用対効果の悪化に伴い、基地通信機能をはじめとした各種効率化・合理化という課題も同時並行的に解決をしなければなりません。このため、隊員・部隊が積み上げてきた実力を、違う分野に転換させる、場合によっては切り捨てても新たな道に進めなければならぬ時代がきたことを部隊・隊員に徹底することも必要であると考えます。この厳しい「時代の要請」に応えられるよう、西部方面システム通信群は練磨しつつ伝統を継承してまいります。

信友会の皆様方におかれましては、引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

システム通信運用の展望と課題

陸上総隊司令部運用部システム通信課長

一等陸佐 小林 理



信友会の皆様には、平素からご指導、ご鞭撻、また格別のご支援、ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

平成三十年三月に陸上総隊が新編され、翌三十一年三月には地下指揮所（通称バンカー）が完成、陸自部隊の一体的運用及び統合任務部隊の編成を見据えた陸自の作戦中枢機能が本格的に始動しました。私は、直後の三月二十六日に運用部システム通信課長を拝命し、以来、バンカーで勤務しています。今回は、昨年実施した総隊新編後初のJTF編成による台風十九号対応等、バンカー勤務を通じて感じたシステム通信運用の展望と課題について、紹介させて頂きます。令和元年十月十三日未明に台風十九号が列島を縦断、被害が複数方面隊に跨っていたことから、陸自部隊の一体的運用を早期に決心し、被災方面隊への増援準備を開始しました。同日十六時には陸上総隊司令官をJTF指揮官として、陸災、海災、空災を隷下に入れ、三万一千名態勢を確立、十一月八日まで統合運用による幅広い活動を実施しました。

システム通信運用に関しては、地域の特性を知り抜き、平素から自治体や事業者等と緊密な連携を有し、かつ駐屯地や補給処といった作戦基盤を有する各方面隊のシステム通信基盤が、幸いほとんど無傷で活用できたため、増援部隊には必要最小限の通信科部隊を同行させました。衛星通信は、陸自の運用統制権限が陸幕から総隊に委譲され、これを境に平素から総隊が優先順位を判断し、統制することになりました。

また、今やオペレーションとセットになった映像伝送とVTCですが、映像伝送は、情報収集は勿論、情報発信上も有効に機能したと評価しています。一方、VTCは、コロナ禍で勤務形態が変化し、益々の所要増大も予測されるため、安定した回線により輕易に使用可能な基盤整備が必要です。

現在、陸上総隊は、第四代司令官吉田陸将の下、更な

る進化を目指しています。これまで比較的低強度かつ単独で生起する事態において、陸自中央作戦司令部として実力を整えてきましたが、防衛・警備事態や大規模災害への対応を見据え、個々のオペレーションを総括する作戦を立案するとともに、隷下部隊の任務、編成、作戦地域を定め、戦力維持基盤や情報収集と併せ、システム通信基盤を構築する等の戦域設定を行い、更に、統合及び日米共同の要として機能する戦域戦略司令部として、発展的役割を果たしていくことが求められています。

このため、米軍、海・空自と連携した領域横断作戦、特にサイバー、電磁波領域における戦い方の創造、空挺団や水陸機動団など唯一無二の直轄部隊の機動的な運用と一体化したシステム通信運用、採証や事態認定、SC(※)にも資する映像伝送運用等、解決すべき課題は多々あります。

更に、来夏には、国家の威信をかけた東京五輪が開催されます。台風等に伴う風水害も心配される中、自治体はもとより、会場警備の他、万が一の時の不法活動等に対処すべく、警察や海上保安庁との連携も必要であり、通信装備等の互換性向上を推進することが不可欠です。

陸上総隊システム通信課は、陸自部隊のシステム通信運用を司るトップランナーとして、最先端の動向にキャッチアップし、スピード感をもって、課題解決に全力で取り組んで参りますので、信友会の皆様のご協力、お力添えを賜りますよう、重ねてお願いし、終わります。



システム通信課（令和二年度前期転出時）

※ SC=Strategic Communication：戦略的コミュニケーション

「陸上自衛隊通信電子の現状」

陸幕通信電子課

一 はじめに

我が国をとり巻く安全保障環境を概観すると、これまで核実験や弾道ミサイル開発を推進してきた北朝鮮は、近年、前例のない頻度で各種ミサイル発射を繰り返し、同時発射能力や奇襲攻撃能力を急速に強化するとともに、サイバー領域において大規模な部隊を保持し、その能力を向上させ、大規模な特殊部隊も引き続き保持する等、看過できない状況は継続しています。また、中国は透明性を欠いたまま軍事力を強化するとともに、力を背景とした一方的な現状変更の試みを継続させているほか、我が国周辺での行動の活発化等、地域・国際社会の安全保障上の懸念となっています。さらに、サイバー空間や宇宙空間などの新たな領域の安定的な利用の確保等、グローバルな安全保障上の課題も顕在化してきています。

このような中、陸上自衛隊は、情勢・技術の変化に即応し与えられた任務を完遂し得る部隊等を創造するとともに、平成三十年十二月に策定された「平成三十一年以降に係る防衛計画の大綱について（以下、「三〇大綱」という。）」等に基づく多次元統合防衛力を実現する陸上防衛力の構築を推進しており、平成三十年度末に新編された陸上総隊による陸自部隊の一体的な全国運用態勢の下、抑止及び対処等の更なる実効性の向上に努めております。

二 システム通信等に関する状況

情報通信技術は、その急速な発展と普及に伴い、社会経済活動の基盤として必要不可欠なものとなっております。システムやネットワークに障害が起きた場合、国民生活や経済活動に大きな影響を及ぼす可能性があります。

我が国において、サイバーセキュリティに関し、平成三十年度に政府機関に対する不審な通信として検知されたもののうち、対処の要否について確認を要する事象が、マルウェア感染の疑いは一一一件、標的型攻撃は六六件に上り、その脅威は日々高度化・巧妙化しています。情報通信システムの安全性を確保するため、侵入防止システムの導入及び防護システムの整備、二十四時間態勢での通信ネットワークの監視やサイバー攻撃への対処、規則の整備、最新技術の研究、人材育成、他機関との連携など、総合的な施策を行っています。また、米陸軍サイバーCoreに連絡官を派遣するとともに、米国防大学などのサイバー専門課程に

隊員を留学させる等、米国との連携を強化しています。令和二年度末においては、日々高度化・巧妙化するサイバー攻撃に適切に対応するため、自衛隊指揮通信システム隊サイバー防護隊（共同部隊）が昨年度に引き続いて増員されるとともに、システム通信団隷下のシステム防護隊がサイバー防護隊（仮称）として改編される予定です。

三 主要通信電子器材等の整備

令和二年度は、OH多重通信装置を西部方面システム通信群に、戦術データ交換システム連接装置を第五地対艦ミサイル連隊に導入して野外のネットワークインフラを強化し、即応性を向上させます。また、ネットワーク電子戦システムを第三〇一電子戦中隊（仮称）に導入して電磁波領域における能力を向上させます。

四 おわりに

現在も引き続き、サイバー空間や宇宙空間などの新たな領域での活動を見据え、C4ISR能力の強化を推進するための検討が行われております。通信電子課は、これらの検討に積極的に取り組むとともに、陸自のC4ISR分野の充実発展に寄与して参る所存です。信友会会員各位におかれましては、より一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



通信電子課長（左から三人目）と各班長

指揮官として目指すもの

東北方面通信群長

一等陸佐 弥頭陽子



信友会の皆様、平素からの現役通信科隊員へのご支援、ご協力に厚く御礼申し上げます。

私は、令和元年八月一日付で東北方面通信群長を拝命し、要望事項に「即応必通」「挑戦」を掲げ、上番一年余が過ぎました。この度、信友会機関紙において女性初の指揮官職をテーマにされるということで、投稿の機会を得ました。

陸上自衛隊においても女性活躍推進の取り組みが様々な行われ、配置基準の見直し、仕事と家庭の両立支援制度の充実など、環境が整えられてきています。私自身、約二十五年の勤務を通じ変化を感じています。無論、隊員が抱える課題は多様であり、直ちに全ての隊員が働きやすくなるとは限りませんが、上司や同僚の理解、協力が無いと実現できないこともあります。

投稿の機会を得ることとなった、女性初の群長という視点ですが、この影響は、私自身より群の隊員の方が大きいかもしれません。組織の特性上、女性という理由から歴代群長と全く異なる対応をしている隊員はいないと思いますが、全て同じかと問えば、それも違うと思います。女性という点で、図らずも様々な気遣いをしていることでしょう。私たちは平成四年に女子一期生として防大入校以来、「女性初」ということを度々言われてきました。「一」という数字を捉えればそうかもしれませんが、卒業し、部隊に配属された時点で、既に沢山の先輩が活躍していました。諸先輩が真に「一」から築き上げた礎により、私たち後輩は働きやすい環境の恩恵にあずかっています。

自衛隊の指揮官として目指すべき、考えるべきことは男女を問いません。私自身、小隊長、中隊長、海外派遣部隊・機関の幕僚などを経てきました。経験の積み重ね、上司のご指導や同僚の支えがあつて今があると思います。指揮官の悩みは、人、物、予算、時間、場所を組み合わせ、部隊の精強化を図り、如何に任務を遂行するか

に尽きます。制約はありますが、組み合わせ次第で部隊は虎にも、猫にもなります。これに不可欠な事は掌握ですが、簡単ではなく、中でも難しいのは人の掌握だと考えます。人の組み合わせには自らも含まれており、隊員を「知る」だけではなく、隊員に「知られる」ことも重要です。私が女性という事も沢山の「知られる」要素の一つと考えています。

「部隊は生き物」とはよく言ったもので、怠ければ自然と筋力は落ち、鍛えれば強くなります(教育訓練)。但し、時には休むことも重要です(休暇付与)。外敵から身を守り(防衛・治安出動)、仲間を守るために活動する(災害派遣)。時には落ち込んで慰める(服務指導)。いざという時に「準備できていません。」では許されない。日々これらの繰り返しです。

八月に隷下部隊の検閲を終え、新たな課題もみえてきました。また、「三〇大綱」における「新たな領域」のうち、電磁波・サイバー領域に関しては、通信科が推進力となることを期待されています。これに応えるべく、東北方面通信群では、中期的な視点で人材の確保・育成を推進するプロジェクトを立ち上げ、群一丸となって取り組んでいます。これは、新たな領域へ対応する人材と全国規模の人事交流を見据えた東北方面通信群の伝統を継承し得る人材の育成を目的としています。日々勤務する中で、最近特に、ある先輩が教えてくれた言葉が頭をよぎるようになってきました。「演習も部隊も『慣れてきた』と思つたら、そろそろ終わりだよ。」

引き続き部隊精強化のため、尽力してまいりますので、信友会の皆様におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。



通信群長(前列中央)と群本部

師団通信大隊初の女性指揮官として

前第四通信大隊長

(現陸上幕僚監部指揮通信システム・情報部 指揮通信システム課勤務)

二等陸佐 松澤理恵子



信友会の皆様、新年おめでとうございます。平素から、我々現役通信科隊員へのご支援、ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、令和元年八月に第四通信大隊長兼ねて第四師団司令部通信課長を拝命し、早一年が過ぎました。着任一か月も経ないうちに発生した令和元年八月の前線に伴う大雨(佐賀県)のため災害派遣に参加したのを皮切りに、台風十九号、新型コロナウイルス感染症への対応、令和二年七月豪雨と、多くの災害派遣に携わってきました。この間、地域配備師団の通信部隊としてのあるべき姿を模索しながら、隊員とともに汗を流しつつ、各種訓練・支援に励んで参りました。

私自身、これまでの短い部隊勤務の中で小隊長時代を師団通信大隊で過ごし、そこで素晴らしい歴代の通信大隊長にお仕えさせていただいたこともあり、師団通信大隊長への強い憧れを抱いていました。もちろん、着任にあたり、「師団通信大隊初の女性指揮官」であることを意識しなかったわけではありましたが、北部九州の防衛警備を担う第四師団の指揮の命脈を担い、また、二百名以上の隊員とその家族を預かる指揮官として、男性、女性にかかわらず、大隊長に求められる役割は同じであり、一所懸命にその任を果たすことが使命であると自らに言い聞かせています。災害派遣をはじめ、指揮官として状況判断をしなければならない場面はこれまで幾つもありましたが、その都度、幕僚や隊員は私の背中を見てきており、そこには「女性の大隊長だから」という言い訳や逃げ道はないと思っています。厳然として求められるのは指揮官としての役割であり、それを遂行し得る能力を身につけるべく、日々精進することなのだと思ひます。初めて女性の大隊長が着任するにあたり、おそらく幕僚や隊員は、当初どのように接したらよいのか随分悩んだことと思います。それでも、九州男児という言葉が残る土地柄にもかかわらず、女性である私を大

隊長として温かく受け入れ、支えてくれる隊員たちには、感謝しかありません。

その一方で、女性指揮官だからこそできることは何か、ということも日々模索しています。昨年度末には、部隊で初めて「女性自衛官会同」を開催し、服務指導のあり方や結婚・出産・育児と仕事との両立に関して意見交換を行い、女性自衛官が持つ漠然とした不安の除去に努めるとともに、各中隊長、先任上級曹長等に対して、女性自衛官の育成に係る指導を積極的に行い、各種制度の理解促進を行っています。また、いわゆる「女性らしさ」が私自身にどの程度備わっているのか甚だ疑問ですが、可能な限り現場に足を運び、隊員と積極的にコミュニケーションを図り、風通しの良い雰囲気醸成に努めています。

防衛計画の大綱にも謳われているとおり、女性自衛官の活躍推進は、今後ますます拡大の一途をたどり、女性指揮官も珍しくない時代になってきています。「女性だから下駄を履かせてもらっている」と思われまいように、ひとりの自衛官として、自らの役割に見合う資質及び識能を身に付けなければなりません。女性であるからこそ得られる視点や強みを活かしていきたいとも考えています。何より、こうして女性であつても活躍の場を与えてくださった上司、そしてそれを支えてくれる同僚、部下があつてこそこの「今」があることを噛みしめて、今後とも精進して参りたいと思います。



部隊初の女性自衛官会同を開催

会 員 だ よ り

近況報告

会 員 河 田 稔

関東処の通信電子部長、通校の研究部長、関西処の整備部長を経て、最後は、海田市の業務隊長で退官した河田です。

退官にあたっては、何らかの形で自衛隊との関係を持ちたいと考え、奈良市の危機管理部門に再就職いたしました。着任して次の日に紀伊半島大水害があり、早々に五条市に派遣されました。その時は、市のことは何もわからないので、仕方なく、自衛隊時代と同じように指揮所を作り、パワーポイントでプレゼンし、災害対策本部活動を自衛隊風で行っていました。その結果、五条市は、今でも自衛隊風の指揮所活動を実施しています。これ以降、防災に目覚めましたので、六十の定年後も地元の川西市に戻り、地域防災マネージャーとして年間三十回以上の防災講座を開いており、防災業務を満喫していました。

この間、中部方面通信群のOB会である通信会の会長と隊友会伊丹・宝塚・川西地域支部長を拝命するとともに、家族会にも参加しており、自衛隊との関係は継続しています。

また、余暇では、現役の時同様に剣道を継続しており、平成最後の日によくやく七段に合格しました。「交剣知愛」をモットーに引き続き精進します。

最後に、今年の四月から、防災を後輩に譲り、新たな挑戦を始めました。民間の胃腸科病院の事務部長に就任しました。医療業務は、今まで全くやったことがなく、用語が全く分かりません。まるで、宇宙語です。薬の名前も、病名も、四苦八苦しています。一番悩んでいるのが、職員の意識改革です。自衛隊のように上意下達なんてことは全くなく、自分勝手な判断が横行しています。どうすればいいのか。頑張れるところまでやるしかないと思います。が、自衛隊がどれだけのいい組織で、素晴らしい仲間がいたのかと改めて感じているところです。



『交剣知愛』

趣味が高じて「ウクレレ作り」

会 員 加 藤 三 千 夫



私は、平成十六年十二月自衛隊を退官、平成十八年四月から防衛大学校防衛学教育学群で八年間文官教官として勤務し、平成二十六年三月末日再度退官しました。

現在、日本防衛学会（国の防衛・安全保障諸問題に関する学術会議協力研究学術団体）事務局参与として、春・秋の研究大会開催諸準備のボランティア活動と、豫山会（愛媛県の青少年育成支援等をする一般財団法人）の評議員をしております。その他健康維持のため、週二三回テニスを楽しんでいます。

この機会に趣味が高じてはまっている「ウクレレ作り」を紹介させていただきます。ウクレレとの出会いは、四年前知人から自作ウクレレを弾いて楽しんでいるとの話を聞いた時でした。元々工作が好きでこれまで木工、プラモデル、ロボットなど多種多様な物を作っていましたので、「ウクレレが作れる」と聞いた時、「作りたい!」という強い衝動に駆られ、先生を紹介して頂きました。勿論ウクレレを弾いたことはありません。

ウクレレと聞けば、「牧伸二」の「あゝやんなっちゃったあゝ、あゝ驚いた」程度の知識しかありませんでした。先生曰く、『ウクレレが弾けますか』『弾いたことありません』『弾けないのならダメだ』と断られました。が、どうしても作りたくてウクレレを習う事にしました。生徒は年配者がほとんどで、ボケ防止とか、余暇を皆で楽しもうという人達です。習い始めて三か月後、先生から「そろそろウクレレを作りますか」との話があり、勿論即決しました。

ウクレレは全て手作りです。設計に始まり、型枠作り、木材の選定、ボディ表・裏板と側板を二ミリ程度に薄板化、側板の曲げ、そして接着。角材からのネック・ヘッド作り、指板フレット間隔（音階）計算とフレット金具用の溝切り、金具の打込みなど神経を使う作業が続きますが、ひとつひとつの積み重ねが完成に近づいて行くので楽しみでもあります。一番苦労するのが仕上げ段階の塗装です。塗装は本当に難しい。

ウクレレは形状が同じであっても使用する木材種により、同じ弦を使っても音質（音色）が異なります。興味は募るばかりで、昨年底に小さな工房を建ててしまいました。今では、孫、娘、家内、自分用の専用自作ウクレレで親子三代一緒になって四重奏を楽しむこともあります。

今年は新型コロナ禍のお陰で（？）時間があり余り、八月末までに木材種・形状様々な六台のウクレレを作りましたが、これまでに十五台作ったことになりました。木材種・形状を変えて、今度はどんな音が出るのだろうかワクワクしながら、時の経つのも忘れウクレレ作りにいそしんでいます。

何処に在っても

会 員 木 下 千 敏 志
(明石市理事 総合安全対策担当)

『火災発生!』

平成二十九年十月二十五日午後、明石市消防から職場に緊急連絡が入った。緊張感が走る。市役所から五百mほど東にある『大蔵市場』が火元だ。市役所の窓からも黒煙がもうもうと立ち上っているのが見える。「これは大変なことになる」、一瞬、糸魚川の大火が頭をよぎった。舞い上がりそうな気持ちを抑え、すぐさま現地に職員を派遣し、警察・消防と連携を取った。住民の避難・誘導、けが人の対応、避難所の開設など、急いで処置しなければいけない。人が足りない。そう思っていたところに何人かの職員が部屋に飛び込んできた。

「必要なことを言ってお下さい。何でもやります!」、感動で鳥肌が立った。神戸市など近隣市町の消防も応援に駆けつけてくれ、彼らの巧みな消火活動により、一人の犠牲者も出さず、約十五時間後に無事鎮火した。木造二階建ての住居兼店舗の長屋状の市場（三十三戸、約一千三百㎡）及び近隣住宅四棟が全焼、十一棟が部分焼だった。住宅密集地という悪条件下でよくこの範囲でとどめたものだ、消防の底力に心底驚いた。

この後、被災者や地域の人達と様々な話をした。被災者支援をめぐり、胃の痛くなる日々が続いたが、関係者と協議し知恵を絞った。一番の問題は焼け跡の撤去費用で、つまるところ、市が何らかの補助ができないかということだ。残念ながら災害救助法の適用は困難で、この問題は難航したが、何度か議論を重ね、国県と調整して何とか補助金の目途が立ち、ホッと胸を撫で下ろした。

市で仕事を始めて半年が過ぎた頃で、大変な出来事だったが、これがきっかけで色々な部署の人とも気兼ねなく話ができるようになった。あの火災から三年、今日まで地震、台風、コロナ対応等、気の抜けない日々が続く。



『元自衛隊の木下さんがいるから安心ですね。』と言われることがある。有難い言葉だが、なかなか思ったように行かなくて、職場の同僚を誘って「ヤケ酒」ということもあった。しかし、こんな私でも大切な時間を割いて付き合ってくれる仲間がいてくれることは、本当に有難く、嬉しい。

これから先も色々あると思うが、『何処に在っても』驕ることなく、人との繋がりを大切にしたいと思う。

事務局だより

一 全般

信友会事務局では、令和二年度も会長・副会長の指導のもと、新型コロナウイルスの感染防止を徹底しつつ、参集しての役員会の他、メールによる連絡も活用し、役員間の意思疎通を図り、総会・合同歓送迎会業務(実施の可否も含め)を中心に各種管理業務を行ってまいりました。

二 第五十六回ネット総会の結果報告

新型コロナウイルスの影響による総会の中止を受け、議事内容を信友会ホームページ(以下HPという)に掲載し、メール等によるご意見等を募りましたが、ご意見等は特になく、議事の通り議決されました。

三 地区懇親会

会員相互の親睦を目的とした地区懇親会を、各方面通信群等のご支援を戴きながら開催しております。昨年は、北部方面通信群創隊記念行事に併せて開催する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により中止となりました。本年も引き続き北部方面通信群に支援をお願いする予定です。

四 信友会会員増加施策

信友会会員の減少が継続しており(令和二年十二月一日現在、八三九名)、信友会会員増加施策を平成二十九年度から継続し、通信学校入校中の幹部課程学生に対する信友会会長による講話、課程教育修了時の優秀学生への会長表彰等を行っております。今年度は、新型コロナウイルスの影響により、会長講話の中止や時期変更があり、会長表彰は通信学校による代行となりました。



AOC(BU)学生に対する会長講話

五 信友会メール及び信友会HP

信友会事務局では、会のトピックス、会員の方々の慶弔等に係る情報を信友会メール及び信友会HPを活用し、皆様にお伝えしております。HPでは、最新の記事や機関紙のバックナンバーもご覧になれます。自

事務局からのお願い

信友会入会資格をお持ちの方で、信友会に入会されてない方をご存知でしたら、是非お問い合わせ下さい。

◆会員資格◆
通信科幹部OB及び通信科に関係があった幹部OB等

(定年退官時に三等陸尉に特別昇任された方も含みます。)

宅PC、スマホで或いは勤め先のPCをご利用の方で、まだ信友会メール・HPに登録されていらっしゃらない方は、この機会に是非お申し込み下さい。信友会事務局(信友会のメールアドレス)あてに、お申し込みください。

また、複数登録可能ですので、これまで一台のみで閲覧してこられた方も追加登録可能です。
なお、新年からのPWにつきましては同封のご案内をご参照下さい。

六 信友会役員紹介(※印 新任)

- 〔会長〕 成田千春
- 〔副会長〕 河本宏章
- 〔総務〕 長..住谷正仁
- 藤田公徳、秋山賢司、千頭正明
- 中村靖彦(※)、大野浩俊、畠山浩明
- 酒井郁哉
- 〔機関紙〕 長..熊田栄
- 大森俊之、光井章(※)
- 〔名簿〕 長..白井一弘
- 森田康弘、上西慶明(※)
- 安楽正則(※)
- 〔会計〕 長..藤田英雄、岩口利明(※)
- 〔監事〕 長..須藤二男(総務から転任)
- 押川裕二(総務から転任)

七 掲載記事について

掲載記事の内容と執筆者の職名は、令和二年十二月一日時点のものです。

【編集後記】

コロナ禍の中、昨年度そして今年度の合同歓送迎会も中止となり、会員や現役の皆様とも気軽に懇談することが難しい状況が続いています。例年以上に四十四号が、全国の通信科部隊等のご活躍を伝える一助となれば幸いに存じます。

今号は、陸自システム通信の課題と展望に加えて、女性初の指揮官職でのご活躍もお伝えすることとしました。また、三名の会員の方の元氣にご活躍されている様子を紹介させていただきました。寄稿頂いた皆様には、ご多忙の中快諾いただき、心より感謝申し上げます。

訃報 謹んでご冥福をお祈り申し上げます
(前号以降、判明分)

| 氏名 | 逝去年月日 | 住所 |
|--------|-----------|------|
| 大逸 静夫 | H28.10.08 | 不明 |
| 長澤 春次 | H30.12月 | 神奈川県 |
| 伊藤 文夫 | H30.12.17 | 神奈川県 |
| 池上 郁二 | H31.02.20 | 東京都 |
| 岡田 昭二 | H31.03.09 | 福岡県 |
| 大野 末松 | H31.03.23 | 北海道 |
| 市川 敏夫 | R01.05.11 | 山梨県 |
| 大迫 紘治 | R01.07.06 | 埼玉県 |
| 河内 正臣 | R01.07.30 | 茨城県 |
| 石山 善一郎 | R01.09.11 | 富山県 |
| 濱中 定良 | R01.09.17 | 東京都 |
| 中野 好春 | R01.09.26 | 熊本県 |
| 澤瀬 功武 | R01.10.05 | 宮城県 |
| 神主 晃夫 | R01.11.09 | 新潟県 |
| 吉村 孝治 | R01.11.14 | 愛知県 |
| 坂元 初男 | R01.11.24 | 神奈川県 |
| 中江 正夫 | R01.12.01 | 福岡県 |
| 佐藤 恒 | R02.05.18 | 東京都 |
| 井上 武 | R02.06.11 | 千葉県 |
| 浅野 孝一 | R02.06.18 | 埼玉県 |
| 島田 國司 | R02.07.22 | 東京都 |
| 田村 晃一 | R02.07.25 | 埼玉県 |
| 斎藤 信 | R02.08.31 | 埼玉県 |

※ご家族のご希望により、未掲載の会員の方がおられますことをお断りさせていただきます。

令和二年叙勲おめでとうございます

春

瑞宝双光章 黒木 満春 元補給統制本部

秋

瑞宝小綬章 鈴木 健 元自衛隊情報保全隊司令

瑞宝双光章 工藤 良一 元通信学校

瑞宝双光章 石本 和光 元関西補給処

瑞宝双光章 陣内 紀匡 元補給統制本部

瑞宝双光章 中屋敷明彦 元通信保全監査隊

令和二年度信友会会計報告

(R2.1.1~R2.12.31)

(単位:円)

| 収入 | | 支出 | |
|--------|-----------|-------------|-----------|
| 前年繰越 | 1,514,669 | 慶弔費 | 66,228 |
| 入会費 | 120,000 | 郵送等事務費 | 41,416 |
| 通信等事務費 | 1,100,000 | 印刷費 | 515,780 |
| 利子 | 6 | 原稿料 | 23,580 |
| | | 手数料等 | 98,904 |
| | | #56合同歓送迎会支援 | 398,000 |
| | | 次年度繰越 | 1,590,767 |
| 計 | 2,734,675 | 計 | 2,734,675 |

以上のとおり報告します。
信友会会計幹事

令和2年12月31日
藤田 英雄
岩口 利明

監査の結果、異常ありません。
信友会監事

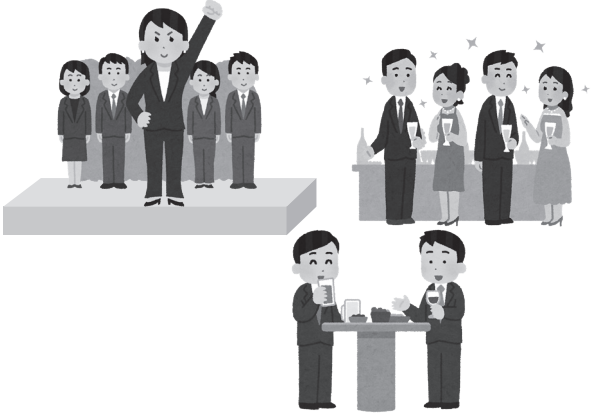
令和2年12月31日
須藤 二男
押川 裕二

信友会新入会員

(R1.12.02~R2.12.01)

| 氏名 | 最終所属 | 入会年月日 | 現住所 |
|--------|--------|-----------|------|
| 加納 信生 | シ通団本部 | R01.12.05 | 神奈川県 |
| 仲間 力 | 通信学校 | R01.12.09 | 東京都 |
| 佐藤 祐一 | 北方通信群 | R01.12.13 | 北海道 |
| 稲田 安円 | 補給統制本部 | R01.12.30 | 東京都 |
| 中古 嘉宣 | 通信補給処 | R02.02.13 | 埼玉県 |
| 田中 義浩 | 善通寺業務隊 | R02.03.16 | 広島県 |
| 星 智雄 | 通保監隊 | R02.03.31 | 福島県 |
| 原口 かな子 | 西方シ通信群 | R02.04.10 | 福岡県 |
| 神道 佳久 | 通信学校 | R02.04.23 | 神奈川県 |
| 大川 正洋 | シ通団本部 | R02.08.26 | 東京都 |
| 中村 靖彦 | シ通団本部 | R02.09.30 | 埼玉県 |

通信科・信友会合同歓送迎会



会員、現職の皆様との合同歓送迎会を実施できる日が早く訪れますことを、事務局員一同、切に願っております。